

『セールスマンの死』 試論

—— ヨコとタテの世界の中で ——

高 橋 克 依

目 次

- I. はじめに
- II. ヨコの軸
- III. タテの軸
- IV. ヨコからタテへ

I. はじめに

Arthur Miller の『セールスマンの死』(*Death of a Salesman*, 1949) が、Miller の代表作のひとつであり、作劇手法においても斬新であったことについて、疑問の余地はない。主人公 Willy Loman の意識を現在と過去の時間的に離れた位置に同時に存在させ、その行き来にとぎれを作らないために、あえて場を区切らないというユニークな手法はその一例であろう。そのために作者は家という装置をたくみに使っている。そこで、本論では、Willy の家を中心にすえてこの作品に込められた様々な問題点を整理してみたい。こうした視点からも、Willy ばかりでなく彼をとりまく人間たちの、社会との関係、また人間どうしの関係があぶり出せるのではないかと考えたからである。

まず、幕が上がって、観客が最初に目にすることになるこの家の、壁について考えてみたい。この壁は舞台装置の家には実際には存在していない。あるのは柱だけである。

Whenever the action is in the present the actors observe the imaginary wall-lines, entering the house only through its door at the left. But in the scenes of the past these boundaries are broken,

and characters enter or leave a room by stepping “through” a wall onto the forestage. (131) (引用の後の括弧内の数字はページを表わす。以下同様)

とあるように、Willy の回想や幻想の中で自由につきぬけることができる。つまり、装置として壁を持たないこの家は、ヨコ方向への動きが可能なることを表わす。これはすなわち Willy の幻想や回想の向かう方向、およびそれに関連する行動の方向である。こうしたものを座標にたとえて「ヨコ軸」という名のもとにまとめてみる。

次に屋根についてである。冒頭のト書きには、

The roof-line of the house is one-dimensional; under and over it we see the apartment buildings. (130)

とある。上(空)が見えるようなつくりを設定することによって、Willy の家からは、近隣にそびえる高層アパート群を見上げられる構造になっている。これは言い換えれば、彼の家はこれらのアパートから見下ろされる位置にもあるということである。屋根板が使用されていないことによって、こうした上からの視線と下からの視線を観客に意識させることになる。つまり、Willy の家の位置を下、アパートの位置(高さ)を上とする上下方向のラインができ上がる。こうした位置関係と、それに付随する諸々の現象を「タテ軸」に置いて考えることにする。

従って、この家は、こうしたタテの軸とヨコの軸を発生させ、またそれらを交わらせる役割をはたすことになる。この双方の軸の持つ意味を考えることによって、この家にそして Willy を中心とした登場人物たちについての考察をすすめてみたい。

II. ヨコの軸

①過去にむかう力

A melody is heard, played upon a flute. It is small and fine, telling

of grass and trees and the horizon. (130)という第一幕のト書きの書き出しの言葉は、どこまでも広がる開拓時代のアメリカの大地を思わせる。フルートの音色や、広大な大地の広がり的情景は Willy の頭から終始離れることはなかった。

BEN: Father was a very great and a very wild-hearted man. We would start in Boston, and he'd toss the whole family into the wagon, and then he'd drive the team right across the country; through Ohio, and Indiana, Michigan, Illinois, and all the Western states. And we'd stop in the towns and sell the flutes that he'd made on the way. Great inventor, Father. With one gadget he made more in a week than a man like you could make in a lifetime. WILLY: That's just the way I'm bringing them up, Ben —— rugged, well liked all-around. (157)

Willy がいつも思い出していたフルートの音色とは、幼いころの父の思い出そのものであり、独特のやり方で大金を稼いでいた父に対する敬意とあこがれをあらわす。そしてその父にならうかのように、17歳でジャングルに入り 21歳で大金を手にしたという兄 Ben に対しても同様の気持ちを抱いていた。Willy がこうした回想にふけると、舞台の壁は取り払われる。舞台の持つヨコへの力はまず第一に、この Willy の幻想・回想への動き、つまり過去への動きを意味するものである。

彼が過去に向かって巡らす思いには、過去の人と人とのつながりを懐かしく思うことも含まれる。この意味におけるつながりとは、Willy の回想に出てくる友好的なつながりであり、いわゆる階級型の構造ではない、人情感のあるつながりのことで、一般的に横のつながりという意味で使われる関係のことである。ゲマインシャフト的のつながりと言ってもよい^(註)。Willy は先代の社長 Wagner を That man was a prince, he was a masterful man. (133)と回顧する。また Wagner の後に社長の椅子を継ぐことになるその息子 Howard が生まれたときにも、Willy はその名付け親になってやるなど、会社内の人間関係には単なるビジネス上の関係をこえたものがあつた。セールス先においても、彼は In those days

there was personality in it, Howard. There was respect, and comradeship, and gratitude in it. (180)と、情に満ちた人間どうしのつながりがあったことを述べている。また Willy の息子 Biff も同様である。かつて上司であった Oliver のもとを去るときのことを、[W]hen I quit he said something to me. He put his arm on my shoulder, and he said, "Biff, if you ever need anything, come to me." (141)と述べている。こうした連帯意識の強い人間関係は、ひとつの家族を連想させるものとも言えるだろう。

また、この幻想・回想への動きの中には、Willy の、家族に隠れた行動もあったことも指摘しなくてはならない。

'Cause I get so lonely — especially when business is bad and there's nobody to talk to. I get the feeling that I'll never sell anything again, that I won't make a living for you, or a business, a business for the boys. (150)

Willy の回想により、彼にはボストンに浮気相手がいたことが判明する。仕事がうまくいかず、行き詰まりを感じたときの Willy は、家庭をかえりみず、浮気相手のもとへ行くことで束の間の心の安らぎを得る。Biff によって、この事実が発見されるまでは、親子関係はうまく保たれていたが、仕事がうまくいっていないという現実を息子たちの前でうまくかくし、よき父親を演じることに彼は疲れていた。このように彼が見せるヨコの動きの中には逃避と家族に対する欺瞞という部分も含まれている。

②地理的な意味

現在の Willy はどうであろうか。彼は車を使って地理的にヨコに移動する。ニュー・イングランドをセールスの担当地域とする Willy はこのヨコへの移動によって現在の成功、すなわち金を手にいれようとする。しかし、彼の仕事は決してうまくはいっていない。彼は昔ほどの売り上げを得られず、日々疲れきって家に帰って来るのである。そうした生活を送りながらも、彼をささえているものは、若いころに出会い、彼の人生を決定させたとも言える Dave Singleman の思い出である。時代の違

い、実力の違いなどを考慮に入れず、彼は Singleman のようなセールスマンとしての成功を夢見ているのである。Biff にも Willy と似たような行動が見られる。

I've had twenty or thirty different kinds of jobs since I left home before the war, and it always turns out the same. I just realized it lately. In Nebraska when I herded cattle, and the Dakotas, and Arizona, and now in Texas. It's why I came home now, I guess, because I realized it. And whenever spring comes to where I am, I suddenly get the feeling, my God, I'm not gettin' anywhere! What the hell am I doing, playing around with horses, twenty-eight dollars a week! I'm thirty-four years old, I oughta be makin' my future. That's when I come running home. And now, I get here, and I don't know what to do with myself. (138-9)

Biff もヨコへ移動することによって成功をつかもうと考える男である。思い通りの成果を得られない彼は、Willy と同じように落胆して家にもどってくる。かつて Willy の父が広い大地を移動し、また Ben がジャングルの中に入っていったようなヨコへの移動とはまったく違って、Willy らのそれは、彼らほどの成果をもたらしてはいないのだ。父や Ben のように、ヨコへ移動することに夢がなくなってしまった、現在の状況をあらわすものなのである。しかしそれでも Willy や Biff にとって、ヨコへの移動とは、現在の仕事において成功をつかもうとする動きを表わしているのである。

以上をまとめれば、ヨコ軸とは、現在という視点から見て実現しないもの、またとりもどすことのできないものという意味があると考えられる。

Ⅲ. タテの軸

作品の舞台はブルックリンである。大阪市立大学経済研究所編『ニュー

ヨーク』によれば、この地は 19 世紀中頃から徐々に人口が増え始める。1883 年ブルックリン橋完成、88 年フルトン通りの高架鉄道完成、1903 年ウィリアムズバーグ橋完成、05 年 IRT のブルックリンへの延伸、09 年マンハッタン橋完成、13 年 BMT の開通などにより、今世紀初頭にかけて次第にビジネス地区マンハッタンとの関係を強めていき、人も数多く移動するようになり、1920 年代にはすでに、人口においてマンハッタンをしのぐようになってくる。

舞台背景に現われる高層アパートは、Willy の家を取り囲むように、四方をふさいで高くそびえている。都会からの人口流入が進みつつあるこの地域において、高層アパートは新しい生活、すなわち現代の生活・社会の象徴でもある。

The street is lined with cars. There's not a breath of fresh air in the neighborhood. The grass don't grow any more, you can't raise a carrot in the back yard. They should've had a law against apartment houses. Remember those two beautiful elm trees out there? When I and Biff hung the swing between them?

.....

They should've arrested the builder for cutting those down. They massacred the neighborhood. More and more I think of those days, Linda. This time of year it was lilac and wisteria. And then the peonies would come out, and the daffodils. What fragrance in this room!

.....

There's more people! That's what ruining this country! Population is getting out of control. The competition is maddening! Smell the stink from that apartment house! And another one on the other side... How can they whip cheese? (134-5)

生活状況の激変を恨む Willy であるが、現代の新しい生活の波は容赦なく彼にせまる。そしてこれらのアパートと Willy の家の高低差は、あたかも現代生活への順応度を示すかのように、そしてその序列化を象徴す

るような位置関係を示している。すなわち、高いもの、高いところにあるものが現代の社会をあらわすものであり、低いところにあるものがその波に翻弄されるものという関係である。この時点ですでに Willy は敗北者としての宿命をになわされていたととらえることも可能である。

こうした新しい社会の構造の中での成功者として、具体的に示されるのが Howard や Oliver である。この意味で、彼らを上位に、Willy や Biff を下位に見るのは容易であろう。Howard は Willy の上司として、売り上げの悪さを非難し、彼の身分保証についての権限も握っている。Willy にとっては、Howard は自分の仕事上の運命を決定する存在なのである。

Biff についても同様である。生活を一新しようと、かつての上司 Oliver のもとへ借金の申し込みに行く。しかしそこでは長時間待たされたあげく、やっと面会がかなっても、Oliver はほとんど彼のことを記憶すらしていないという、あっけない結果に終わってしまった。絶望した彼は、Oliver のオフィスから万年筆を盗みだし、11 階の非常階段をかけ降りるのである。現代のビジネスの成功者である Oliver と、彼に相手にされなかった Biff。そこには上にいる Oliver と、その場から下にさがる Biff という上下（タテ）の構造が読み取れるのである。

以上タテ軸とは、実現不可能なヨコ軸に対して、現在の状況や現実をあらわすものと言えよう。

IV. ヨコからタテへ

Willy のヨコへの動きは、徐々にその可能性を絶たれ、最終的にそのすべてがかなえられないものとなってゆく。Willy にとって、幻想・回想はあくまで過去のものであり、しかも、彼自身が都合よくつなぎあわせているだけなのかもしれない。いずれにせよ現在の状況下では、彼が過去へ思いをはせる行為は単なる後悔と懐かしみだけのものでしかないのである。また、現在において、Willy が仕事を求めてヨコへ移動しても、何の成果をもたらすものでもない。彼の性格、考え方、人間関係など、とりかこむ状況すべてが彼の味方ではないのである。社会の環境はヨコの

動きを封じてしまった。つまり立ち並ぶ高層アパートに象徴される新しい社会、ビジネスのかたち、人間関係、こうしたすべての構造がタテという言葉でまとめられる時代になってしまった。このヨコからタテへの転換、そしてそれらの構造の決定的な違いが Willy をとまどわせ、追い詰めてゆくのである。

ここには現代社会における適応者と、そこに助けを求める者という関係ができあがっている。新しい勢力と、力なき者たちとのあいだには、非情な地位的、実力的上下の関係ができあがる。Willy が成功していたころ、すなわち過去においての人間関係では、友情や思いやりがその中心をしめていた。個性が尊重される中で、情のつながりがものを言った時代であった。ところが現在は、彼の言葉を借りれば、it's all cut and dried という時代であり、友情など入りこむ余地のない、ビジネスライクな関係でむすばれる世界なのである。利益をあげられない者、能力のない者は切り捨てられる時代にあつては、Willy にあたたかかった先代社長から代がわりした息子（現社長）の Howard にさえ、業績不振を理由に解雇されてしまう。ニュー・イングランドまわりからニュー・ヨーク勤務にうつしてほしいと彼に助けを求めても、ここには情を切り捨てる、冷やかな上下関係が存在するだけである。

CHARLEY: Willy, when're you gonna realize that them things don' mean anything? You named him Howard, but you can't sell that. The only thing you got in this world is what you can sell. And the funny thing is that you're a salesman, and you don't know that.

WILLY: I've always tried to think otherwise, I guess. I always felt that if a man was impressive, and well liked, that nothing ——
(192)

Willy は現在の上司と部下、それも現代的な意味での支配者と被支配者というタテの関係に気づけなかった。彼の抱いていた考え方は、たとえそれが自分の息子同然の思いをよせる相手、すなわち、自分自身では一種の家族の一員のように考えていた人間に対してすら、現在のビジネスという構造の中にあつては、持ち込むことを許されない感情、時代遅れ

の感覚なのである。それよりも、現在は利益を第一に考える時代であり、業績があげられなければ切り捨てられる時代なのである。こうした意味ではゲゼルシャフト的な時代に変化をとげたと言える。

ここで Willy と Ben を中心とする、父と子の関係についても考えておかなければならない。Willy の回想によれば、かつては Biff や Happy との関係は見かけ上うまくいっていた。息子たちは Willy が得意気に話す仕事の話に聞きほれ、Biff は父が帰って来たときには、遊びに来た友人たちを待たせてまで Willy との関係を大切にした。もちろんこのときの Willy の話は事実ではないようである。仕事の成績の悪さ、評判の悪さ、浮気相手の存在など、Willy の本当の姿は、息子の前で見せる姿とは大きくかけはなれている。彼は息子たちに尊敬させ、特に Biff の学校の成績が悪いことや、盗み癖があることを黙認して、形だけは信頼関係のあついで、円満な関係を築くのである。この時点では、息子たちも Willy の欺瞞に気付いていなかったという点では幸福である。そして、特に Biff の現実の姿を正しく見ようとせず、「人に好かれていさえすればよい」という妥当性に欠ける教育によって、まやかしの父子関係を演じるのであるが、この関係は Biff が Willy の浮気現場を目撃することで、一気にくずれさる。You fake! You phony little fake! You fake! (208)これは今まで築きあげてきた父子関係の、そして Willy が息子たちに教えこんだ人生観、教育観のすべてに向けられた言葉と言える。経済的な depression に苦しんでいた Willy にとって、これはいわば父子関係の depression である。Willy は幻想の中で Ben に語りかける。

Oh, Ben, how do we get back to all the great times? Used to be so full of light, and comradeship, the sleigh-riding in winter, and the ruddiness on his cheeks. And always some kind of good news coming up, always something nice coming up ahead. And never even let me carry the valises in the house, and simonizing, simonizing that little red car! Why, why can't I give him something and not have him hate me? (213)

Willy が息子たちの前で演じたことはすべて fake だったのである。家庭

の中で、過去において築きあげてきた関係が fake だった。彼が息子たちとの all the great times を回想する動き、つまりヨコへの動きは Willy 自身がどんなに執着してみたところで、それはもとをただせば fake な関係であり、現在の、Biff との破綻した関係の修復不可能な原因であることには変わりがない。しかし、Willy はそれを認めようとはしないのだ。そればかりか、昔の、自分が息子たちから慕われていた時代に思いをはせ、保険金を残すことで Biff の心を自分に向けさせようとする。つまり、過去の関係へもどろうとするヨコへの動きにこだわるのである。

一方、Willy の過去は Biff の過去でもある。自分の過去の中に fake に汚染された部分があったことを認識した彼は、迷いをふりきり、ヨコへの動きを中断し、ここではじめて「上」に向かって助けを求める行動をとる。

I ran down eleven flights with a pen in my hand today. And suddenly I stopped, you hear me? And in the middle of that office building, do you hear this? I stopped in the middle of that building and I saw — the sky. I saw the things that I love in this world. The work and the food and time to sit and smoke. And I looked at the pen and said to myself, what the hell am I grabbing this for? Why am I trying to become what I don't want to be? What am I doing in an office, making a contemptuous, begging fool of myself, when all I want is out there, waiting for me the minute I say I know who I am! (217)

借金をこたわられた Biff は、前述したように、Oliver のオフィスを出て非常階段をかけおりる。この上から下へというタテの動きの中で、彼ははじめて自分の現実と適性に気がつき、新たなヨコへの動きを望むのである。この Biff のヨコへの動きは、今まで彼や Willy が見せたものとは違って、はっきりとした自己認識、自己発見につながるものであり、今までとは全く別の種類の、可能性を秘めたものといえるだろう。Willy と同じように、「上」からの助けはなかったものの、Biff には次なる可能性が残されたわけである。

あくまでも過去における父子関係に執着し、Biff を支配しようとする Willy に、Biff は Willy が地下室で自殺を図ろうととりつけたホースをとりだして見せる。

BIFF: What is this supposed to do, make a hero out of you?
This supposed to make me sorry for you?

WILLY: Never heard of it.

BIFF: There'll be no pity for you, you hear it? No pity! (216)

Willy が最後の手段を使ってまで父の威厳を保とうとした行為に対して、Biff はそれすら fake であるとでも言いたいのであろう。ここにおいて Willy と Biff は、回復不可能な過去へ執着する者と現実を積極的に受け入れようとする者という点で、認識に大きな隔たりが生じることになる。Biff が今を認識したという点で Willy より優位に立ったと言ってもよいだろう。ヨコ軸の中に身をゆだねていた Willy は、タテ軸の中では身の置き場をもはや見つけることはできない。冒頭のシーンにおいて、息子たちのベッドルームが Willy たちのそれよりも上に配置されるという象徴的なタテの配列を見てとることができるが、その時点よりも Biff ははるかに精神的な成長をとげており、ここに父親を凌駕し、父親の生きる世界とは全く別の世界を生きようとする息子という関係ができあがるのである。Willy はこの時点において、Biff よりも現実への対応力の低い者となってしまった。

Willy は Biff に保険金を残すことを第一の目的にして、車に乗って自殺を図る。自分がずっとこだわり続けたヨコ方向に対しての最後の行動と言えよう。Willy は、Loves me. Always loved me. Isn't that a remarkable thing? Ben, he'll worship me for it!(219)と最後まで Biff の気持ちを自分に向けること、つまり父親として尊敬される自分を取りもどすことを夢に見続けたのだ。彼の自殺はこの点では無意味であり、彼の期待した死にはできなかった。さらには最後まで彼を理解し、支えてきた Linda やもう一人の息子 Happy には何の事実も知らされないままとなってしまった。

父子の関係における過去、仕事、人間関係、こうした Willy がかつて

満足し、自分の生き方が正しかったと確信できるよすががすべて失われてしまった。これはヨコへの動き、こだわりが意味を持たず、彼自身の生き方があやまりであったことのあかしであり、最終的に Willy にこれ以上生きることの意味が認められなかったことを意味する。Willy をとりかこむ現在は、仕事の上でもタテの軸の中にあり、彼はその軸の下のように置かれ、家庭内にあっても父の力が失墜、つまり、下に追いやられてしまったからである。

作者 Arthur Miller は Willy Loman という名前について次のように語っている。

In later years I found it discouraging to observe the confidence with which some comentators on *Death of a Salesman* smirked at the heavy-handed symbolism of “Low-man.” What the name really meant to me was a terror-stricken man calling into the void for help that will never come. (179)

Willy は我が身のおかれた閉塞的状况の中でヨコに向かって助けを求める。しかしそれらは、今となっては何ひとつかなうものではなくなった。それではタテはどうか。上からの助けも来ない。あくまでヨコにこだわり続け、タテ、つまり現在をないがしろにした者への悲しい、しかし的確な仕打ちである。墓地に埋められた彼に対して、すべてが見おろしていただけなのである。

〔注〕

ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（後出）に関しては『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト——純粋社会学の基本概念——上・下』を参考にした。なお、『現代社会学のエッセンス 社会学理論の歴史と展開』では、これを解説して、「一八八一年の論文では文化哲学として意志論を展開し、人間の継続的な行為をマイナスの方向への敵対とプラスの方向への貢献とに分けて、この両者の混合度によって、多数の者の間ではじめに人格的な信頼関係が前提されることによって相対的に敵対を抑制して貢献を促進しあう場合と、相互にまず相手の敵対か貢献かの程度を見て、これに応じて態

度をきめることによってあとから人格的な信頼関係が形成される場合と大別して、前者の傾向をゲマインシャフトに、後者のそれをゲゼルシャフトにそれぞれ対応させている。(中略)ゲマインシャフトの原型は家の共同生活であって村落や小都市の共同生活もその延長としてとらえられており、ゲゼルシャフトの原型は商業における社会的活動を基本として描かれているということができる。」(36-8)とある。

【引用文献】

Miller, Arthur. *Death of a Salesman. Arthur Miller's Collected Plays. Vol.1.* New York: The Viking Press, 1957.

——. *Timebends.* New York: Grove Press, 1987.

田野崎昭夫「テンニエスの理論」『現代社会学のエッセンス 社会学理論の歴史と展開』新明正道・鈴木幸壽監修、ペリかん社、1996.

【参考文献】

テンニエス『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト——純粹社会学の基本概念——上・下』岩波書店、1957.

大阪市立大学経済研究所編『ニューヨーク』東京大学出版会、1987.

Abstract

An Essay on *Death of a Salesman*
— In Horizontal and Vertical World —

Katsuyori TAKAHASHI

This paper treats Arthur Miller's *Death of a Salesman*. According to the stage direction, the wall of the Lomans' house on stage is ignored when Willy thinks about his past. The actors are allowed to move across the wall-lines. Therefore, thoughts about the past are associated with horizontal movement. Besides Willy moves geographically on business. This is also horizontal movement. These movements refers to his unfulfilled dreams because he cannot retrieve his past and his present business flounders.

On the other hand, this house is looked down on by surrounding apartments. These apartments represent a new force in modern life. Its influx threatens Willy's life. From the point of adaptation to new life, we could see *vertical arrangement in the present society between them*. This arrangement is also associated with ranking in the business world. Of course, Willy ranks low.

In light of these considerations, Willy's present situation will be analyzed. Though he asks his boss to let him work in New York instead of New England, he is fired because of his poor achievement. This means that his place goes down vertically. In the last scene, what he shows us is his adherence to horizontal movement, which is suicide by his car. At this point, all his horizontal movements are stopped. When he was buried in the cemetery, he is looked down on by everything including his family.

北星学園大学文学部 北星論集第36号 正誤表

頁・行目	誤	正
44頁17行目	誰れ彼れ	だれかれ
51頁17行目	頭惱	頭腦
67頁16行目	[参考文献] テンニエス『ゲマインシャフ… 念—上・下』岩波書店… 大阪市立大学経済研究所…	[参考文献] テンニエス『ゲマインシャフ… 念—上・下』岩波書店… 大阪市立大学経済研究所編……
159頁(v)13行目	蓮葉図	蓮舟図
158頁(v)1行目		
150頁(㊦)4行目	天竜寺	天龍寺